

Z310a ハンセン病療養所・長島愛生園における天文および気象観測

磯部洋明（京都市立芸術大学）

本発表では、国立ハンセン病療養所・長島愛生園において入所者らが行っていた天文観測および気象観測について報告する。ハンセン病とは、かつては「らい病」と呼ばれた感染症の一種で、患者とその家族は激しい差別を受けてきた歴史がある。日本では明治後期以降患者を強制的に隔離する政策が進んだ。隔離政策は、戦後まもなく特效薬が普及してハンセン病が治る病気となった後も続き、「らい予防法」が廃止されたのは1996年のことであった。全国に全国に10数カ所あるハンセン病療養所には、様々な要因から療養所を出て社会復帰することがかなわなかった回復者の方々が今も住んでいる。

国立療養所の一つ、長島愛生園には、昭和10年から昭和52年頃にかけて気象観測所が設置されており、患者である入所者が気象観測を行い、そのデータは岡山地方気象台の正式なデータとして使われていた。さらにこの気象観測所には昭和24年から30年代にかけて天文台が設置されており、所員が黒点観測や星の掩蔽観測を行っていた。天文台設立のきっかけは、昭和16年に京都大学花山天文台の初代台長である山本一清が同園にて慰問公演を行ったことである。山本が遺した資料の中から、園の気象観測に携わっていた入所者から「今後私はこの島に一生を終わる運命にあり、生をかけてこのこと（天文観測）をやりたい念願です」と天文観測にかける想いを述べた手紙が残っている。その後の戦況の悪化と戦後の窮乏期を経て天文台が設立された後は、彗星観測で知られる本田実が観測指導などを行った記録がある。発表では黒点観測などの記録や当時を知る入所者への聞き取りなどの結果も紹介する。